ユーラシアの火打金(二)：7 ～ 8世紀の朝鮮半島と日本

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 林 俊雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002960

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

ユーラシアの火打金（二）：7 ～ 8 世紀の朝鮮半島と日本

林 俊雄

Ⅰ．はじめに

前稿「ユーラシアの火打石 (一)：西ユーラシア」[林 2024] に続いて、ユーラシア東部の火打金を取り上げる。すでに 2 度取り上げたことがあるので [林 1994; Hayashi 2016]、重複するものはなるべく避け、重要なもののみを見てゆくことにする。また、最近刊行された火打金の総合的著作としては『火打石と火打金の文化史』[藤木 2025] があるので、そこに掲載されているものについては簡略に触れるにとどめ、7、8 世紀の初源期の火打金を中心に紹介する。

東ユーラシアとは言っても、すべての地域ではなく、これまでに私が知ることのできた地域、すなわち日本、韓国、ロシア沿海地区、東シベリア、カザフスタン、中央アジアの四共和国、中国、チベット、インドを対象とする。本稿は次稿「ユーラシアの火打金 (三)：東ユーラシア」に続くが、全体の最後に、火打金に言及した文献史料を検討し、火打金の初源と分布について考えてみたい。

Ⅱ．7 ～ 8 世紀の東ユーラシアの火打金

(a) 日本列島 関東地方

1985 年に発火具を体系的にまとめた高嶋幸男は、6 世紀末から 7 世紀初めといわれる岡山県落合町戸坂（とつさか）1 号墳出土の山形火打金と、7 世紀前半とされている千葉県我孫子市日秀西（ひぶりにし）遺跡 027B 住居跡出土の山形火打金 2 点を最も古い時代のものとしている。これはすなわち、古墳時代後期である [高嶋 1985: 88]。しかし両者の出土状況には、遺物の混入の可能性など問題があると関義則氏から私信で教示を受けた。

また、7 世紀中頃に年代づけられている千葉県佐倉市の松向作遺跡 060 号墳からは牛角形火打金が出土している。しかしその発見地点は不明瞭であり、石室そのものからではなく、羨道（せんどう）か石室前の溝であるかもしれない [鶴見 1999: 49]。ほかにも栃木、茨城、埼玉の関東諸県の 6 世紀あるいは 7 世紀の住居址・古墳から火打金が出土しているが、いずれも出土状況が不明確であり、遺構本体と同時期であるかどうかは分からない [関 2002: 131]。

8 世紀になると、関東諸県で確実な出土例が出てくる。山形火打金ではあるが、両端の方がむしろ高い火打金が埼玉県所沢市東京道南遺跡 2 号住居址 (1 から出土している (5.4×3.5 cm、8 世紀第 2 四半期)（図 1-1）[関 2002]。埼玉県富士見市黒貝戸遺跡 4 号住居址からも、山形火打金が出土している (8.9×2.5 cm、8 世紀第 2 四半期)[関 2002]（図 1-2）。本庄

(1 火打石として使われた石英がこの住居址の覆土から発見されている。

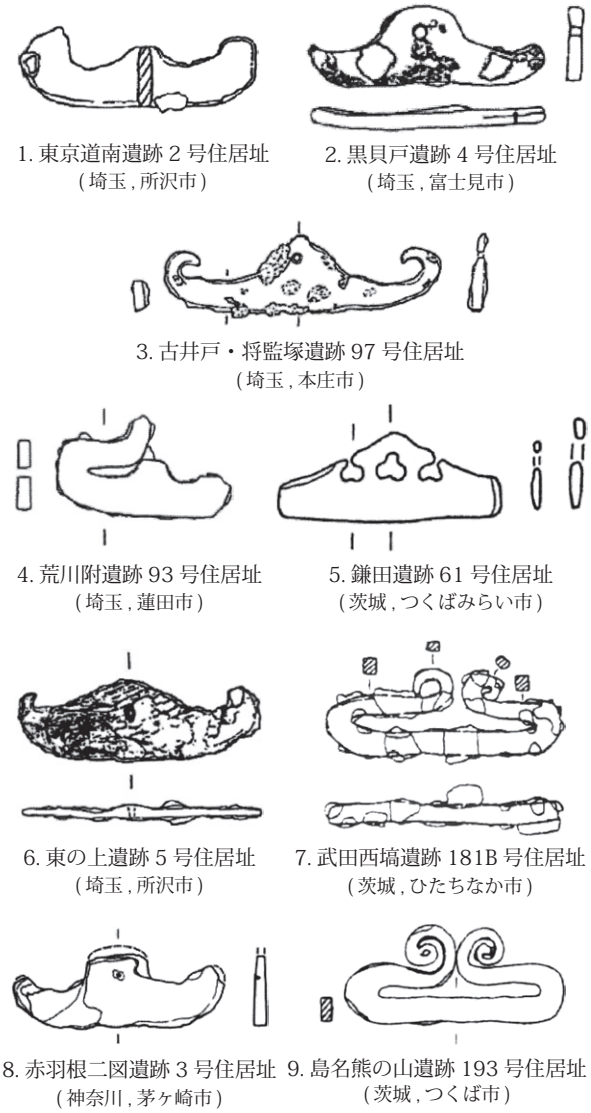


図 1　火打金（日本，関東）

市古井戸・将監塚遺跡 97 号住居址からは、両端がやや反り返った山形火打金が出土している (5.9×2.0 cm)[関 2002] (図 1-3)。蓮田市荒川附遺跡 93 号住居址からは、中央の盛り上がりきわめて小さくて孔が開いておらず、両端が大きく反り返ってむしろ牛角形に近い火打金が出土している (5.2×3.0 cm、8 世紀第 2 四半期)[関 2002] (図 1-4)。

茨城県つくばみらい市鎌田遺跡 61 号住居址からは、3 か所に透かしの入った山形火打金が出土している (8.1×3.0×0.5 cm、8 世紀後半)[鶴見 2005] (図 1-5)。

所沢市東の上遺跡 5 号住居址からは、両端がわずかに反り返った山形火打金が出土している (8.1 ×2.6 cm、8 世紀中頃 ~9 世紀中頃)[関 2002] (図 1-6)。茨城県ひたちなか市武田西塙遺跡 181B 号住居址からは、中央の盛り上がりがなく孔もない牛角形火打金が出土している (7.0×2.5×0.5 cm、8 世紀後半 ~9 世紀初)[鶴見 1999] (図 1-7)。茅ケ崎市赤羽根二図遺跡 3 号住居址からは、両端がやや盛り上がった山形火打金が出土している (6.8×2.4× 0.25~0.45 cm、8 世紀末 ~9 世紀初)[大村 2005] (図 1-8)。

9 世紀中頃の茨城県つくば市島名熊の山遺跡 193 号住居址からは、中央の盛り上がりがなく孔もない牛角形火打金が出土している (7.9×3.3×0.4 cm)[鶴見 2005] (図 1-9)。

(b) 日本列島 九州地方

関東地方以外では 8 世紀の火打金はほとんど知られてこなかったが、2000 年代以降に藤木聡の精力的な調査研究によって、九州地方の 7 ～ 8 世紀から近世まで各時期の火打金が明らかになりつつある [藤木 2014: 2025]。九州でもやはり最古期から山形と牛角形の火打金がある。

福岡県福岡市の博多遺跡第 99 次調査で発見された火打金は、両端がやや盛り上がり、山形が小さな火打金である (6.2×2.2 cm、7~8 世紀) (図 2-1) [藤木 2025: 100, 図 44-2, 49-2]。福岡県福岡市の元岡・桑原遺跡の池状遺構 SX123 から大量の須恵器・土師器などと共に出土した半欠けの牛角形火打金は、中央に盛り上がりや孔がない (復元長 8 cm 前後、7 世紀第 4 四半期 ~8 世紀 (あるいは 9 世紀)) (図 2-2) [藤木 2025: 100, 図 44-1, 49-1]。

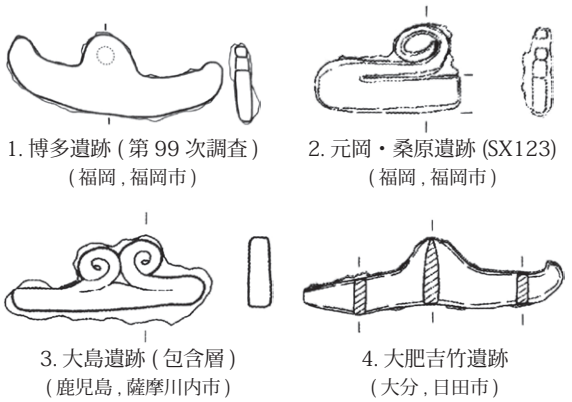
鹿児島県薩摩川内市大島遺跡の 8 ～ 9 世紀の遺物包含層からは、中央に盛り上がりがなく孔もあいていない牛角形火打金が出土している (4.8×1.8 cm、8~9 世紀) (図 2-3) [藤木 2025: 113, 図 48-78, 49-78]。大分県日田市の大肥吉竹遺跡の 8 世紀後半の 6 号住居址から出土した山形火打金は、中央の盛り上がりに孔があいていない (7.3×2.0 cm、8 世紀後半) (図 2-4) [藤木 2025: 108、図 46-48, 49-48]。

関東地方も九州も、確実なところでは 7 世紀末か 8 世紀に火打金は登場しているが、どちらが先かは確言できない。次に朝鮮半島を見ておこう。

(c) 朝鮮半島

藤木は、現在知られている最も古い火打金として、朝鮮半島中西部、京畿道龍仁市の霊徳洞遺跡 I 地点から出土した統一新羅時代 (2 の 8 世紀後半～ 9 世紀前半・中頃の山形火打金を 1 点挙げている (8.9×1.9 cm) (図 3) [藤木 2025: 121, 図 52-1]。中央の盛り上がりに孔があいていない。朝鮮半島ではこのほかに高麗時代 (10 世紀初 ~14 世紀末) のものがやはり 1 点あるだけで、朝鮮時代に入ると急激に増える。

2019 年 1 月に愛媛大学で「たたらの世界－日・中・韓の中世製鉄－」と題したシンポジウムが開かれた際に、韓国から参加した湖西文化遺産研究院の朴相賢(パク・サンヒョン)氏に火打金の資料について尋ねたところ、(2 7 世紀末 ~10 世紀初。



1. 博多遺跡 (第 99 次調査)
(福岡 , 福岡市)

2. 元岡・桑原遺跡 (SX123)
(福岡 , 福岡市)

3. 大島遺跡 (包含層)
(鹿児島 , 薩摩川内市)

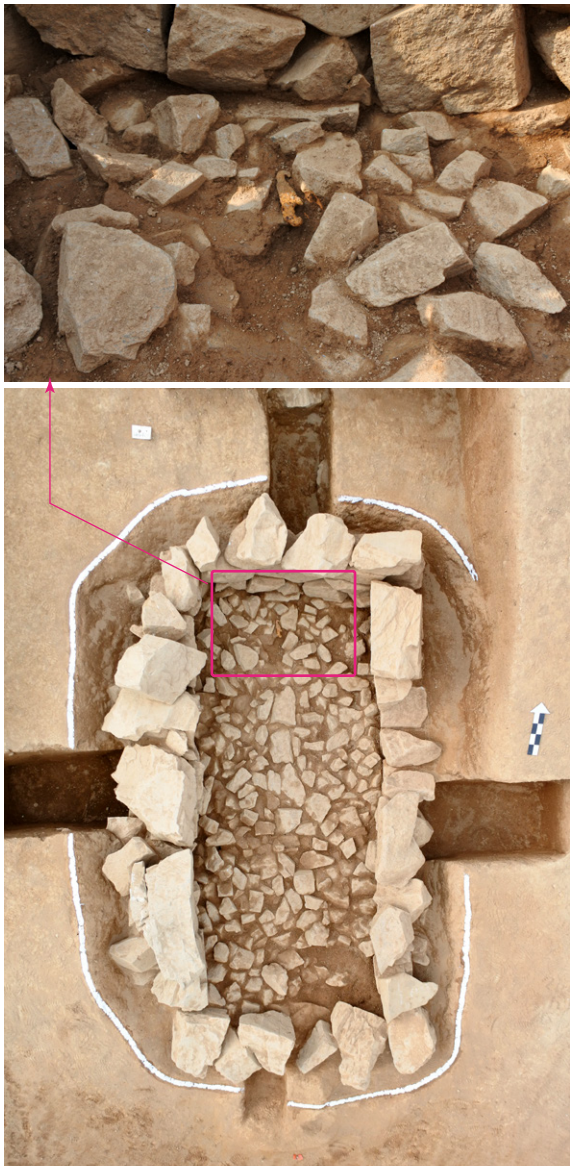
4. 大肥吉竹遺跡
(大分 , 日田市)

図 2　火打金 (日本 , 九州)

霊徳洞遺跡 I 地点
(京畿道 , 龍仁市)

図 3　火打金 (韓国①)

金京鎬（キム・ギョンホ）氏より直ちに 3 編の資料が送られてきた。うち 2 編は 7 ～ 8 世紀の火打金の発掘報告書であり、残りの 1 編は朝鮮時代のものであった。



1. 堤川校洞山遺跡 1 地点 14 号石槨墓

2. 火打金

図 4　火打金（韓国②）

7 ～ 8 世紀の火打金の 1 つは、朝鮮半島西南部湖西地域の堤川校洞山遺跡 1 地点 14 号石槨墓内で、石の間で発見された（**図 4-1**）。両端がやや反り返った山形火打金で、中央の盛り上がりに孔があいているが、片面はふさがっている（**図 4-2**）。この墓が所在する校洞山 13 番地遺跡は 7 世紀前半頃から新羅古墳が造営され始め、平面形が方形あるいは長方形の横穴式石室、平面形が長方形の横口式石室および石槨墓が 8 世紀に至るまで同時に主要墓制として使用されているので [湖西文化遺産研究院 2020: 54, 264-265]、この年代を与えることができる。

もう 1 点は、朝鮮半島中西部京畿道坡州市の法興里古墳 A 地区第 1 号石室墓から出土した。8 世紀前半頃に築造された墓で、火打金として認識されておらず、異形鉄製品と報告されているが、山形火打金であることは間違いない（**図 5**）[湖巖美術館 1993: 52,148,169]。

謝辞：

韓国語の読解は、畠山禎 (元横浜ユーラシア文化館学芸員) ならびに諫早直人 (京都府立大学准教授) の両氏に手伝っていただいた。

引用・参考文献：

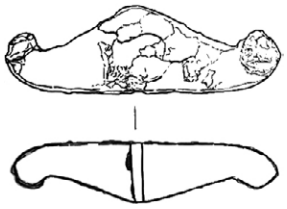
＜邦文＞

大村浩司 2005「神奈川県茅ケ崎市赤羽根二図 B 遺跡出土の火打金」『論叢 古代相模』(相模の古代を考える会 10 周年記念論集) 相模の古代を考える会 :143-148.

関義則 2002「埼玉県内出土の火打金」『埼玉考古』37, 埼玉考古学会 : 117-138.

高嶋幸男 1985『火の道具』柏書房 .

鶴見貞雄 1999「火打具を考える：遺跡出土の火打



法興里古墳 A 地点第 1 号石室墓
(京畿道 , 坡州市)

図 5　火打金（韓国③）

金・火打石を取り上げて」『茨城県考古学協会誌』11, 茨城県考古学協会 : 47-76.
鶴見貞雄 2005「『透かし入り火打金』小考：関東および山梨県出土火打金の古代から中世への形態変化」『古代東国の考古学』(大金宣亮氏追悼論文集) 慶友社 : 666-679.
林俊雄 1994「北方ユーラシアの火打金：ウラル以東」『日本と世界の考古学：現代考古学の展開』雄山閣出版 : 352-369.
林俊雄 2024「ユーラシアの火打金 (一)：西ユーラシア」『金大考古』84, 金沢大学人文学類考古学研究室 : 57-85.
藤木聡 2014「発掘された火起こしの歴史と文化」『宮崎県文化講座研究紀要』40, 宮崎県立図書館 : 23-45.
藤木聡 2025『火打石と火打金の文化史：考古学からみた火起こしの研究』吉川弘文館 .

＜欧文＞

Hayashi Toshio, 2016, Fire-steels in Eastern and Western Eurasia, *International Journal of Eurasian Studies*, *New Series vol. 4*, Beijing: Commercial Press: 1-14. [『欧亜学刊 . 国際版』新 4 輯 , 商務印書館]
Kradin N. N.: Крадин Н. Н., 2018, *Города средневековых империй Дальнего Востока*. Мовква: Изд-во восточной литературы. [『極東中世諸帝国の都市』]

＜ハングル＞

湖西文化遺産研究院 2020『堤川校洞山 13 番地遺跡』湖西文化遺産研究院 .
湖巖美術館 1993『자유로 2 단계 개설지역 문화유적 발굴조사 보고서 1993 년도』(한양대학교 문화인류학과 연구총서 , 제 4 집) 漢陽大学校文化人類学科・湖巖美術館 . [『自由路 2 段階開設地域文化遺跡発掘調査報告書 1993 年度』(漢陽大学校文化人類学科研究叢書 , 第 4 集)]

図版出典：

図 1　1~4, 6. 関 2002　5, 9. 鶴見 2005　7. 鶴見 1999　8. 大村 2005
図 2　1~4. 藤木 2025
図 3　藤木 2025
図 4　1, 2. 湖西文化遺産研究院 2020
図 5　湖巖美術館 1993